留学を終えて

聖マリア女学院高等学校　横山　夕憂（カナダ）

この１年は、あっという間で長いようなとても充実した年だった。毎日が刺激的で、今までの人生の中で１番ともいえる楽しい日々を過ごしていたと思う。この一年の長期留学で、私が何を経験し、何を学び、どのように成長したのかを振り返っていきたいと思う。

カナダに留学することは私のたくさんある夢の中の１つであったため、出国前、私はただただわくわくしていた。が、それと同時に、悲しい気持ちもあった。中学からの仲の良い友達との別れ、大好きな家族との別れ。でも、彼らはいつも私の背中を押してくれたので今の私があるのだと思い、ついに１月１９日、私は１６年間そばにいた両親のもとから遠く離れたカナダにひとり飛び立った。そのときはもう不安な気持ちが一切なく、カナダでの留学生活に対する期待でいっぱいだったため、涙は微塵とも流さず笑顔で日本を離れた。そこから私の留学生活が始まった。

私の派遣先であるアルバータ州にあるコールドレイクについたとき、そこには「カナダにようこそ！ゆうゆ！！」のウェルカムボードを持ったホストファミリーが私の到着を待っていた。若いホストママとパパ、１３歳のホストブラザー、１１歳のホストシスター、３歳と１歳のホストベイビーたちが待っていた。私のホストファミリーに対する初めの印象は“crazy”というものだった。こんなに小さい子が２人もいて１番大変な時に何で私を留学生として受け入れてくれたのか、なんでこんなにも子どもがいるのに私を迎えてくれたのだろうと疑問は尽きなかった。私は赤ちゃんたちのベビーシッターになるのか、なんて思ったりもした。だが私の憶測とは裏腹に、この６人家族はいい意味でクレイジーだった。なかでもホストママには最もお世話になって、毎日ありがとうと言っても言い切れないくらいだった。彼女は２人の赤ちゃんの世話をしながら、大学の授業をオンラインで受講し、上２人の宿題のチェックもして、ほぼ全般の家事もこなしていた。それに加えていつも私の安全を１番に考えてくれて、車での送迎もよくしてくれた。とても心からやさしい人だった。ホストパパはとにかく協力的で働き熱心なのが伝わってきた。日本の車について話し合ったり、映画を一緒に見たりしていた。１１歳のホストシスターは私の小さな英語の先生だった。いつも私が発音し間違えた時、彼女はバカにすることなく私に正しい発音をレクチャーしてくれた。逆に私は彼女に簡単な日本語を教え、いい文化の交換になったと思う。留学期間中私がホームシックにならなかったのは、ホストファミリーのおかげだと心から思う。そんな大好きなホストファミリーと過ごした毎日はすべて私にとっての一番の思い出だが、私は現地の学校生活も楽しんだ。もちろん日本の学校とは全く別のシステムなので初めのほうは戸惑うこともあったが、カナダの学校のラフなところ、楽なところ、ペーパーワークよりもプレゼンテーションが多いところがもっと自分に合っているなと思った。またそこでは一生物の友達がたくさんでき、彼らに“日本人”、“アジア人”として様々な文化の共有ができた。私の友達の中では LGBT の子もたくさんいて、それこそ教科書では学ぶものの、日本人にはまだそれに対しての理解が足りないのではないかと思った。そ

れと同時にカナダ人は自分自身をよく知っていて、自分を表現することがとても上手だと思ったし、自分のことを好きになることが難しい傾向にある日本に比べてみればカナダの生徒はみんなそれぞれが個性を持ち、みんな、誰ひとりとして間違っているものはないんだなと思った。

留学中、私は多すぎる壁に何度も何度も衝突した。はじめは“Pardon?”一言でも落ち込んで黙り込んでしまうこともあった。何かに挑戦するもののあきらめたくなることもあった。ホストファミリーとは小さなトラブルから大きなトラブルまであった。友達とはけんかし気まずくなることもあった。でもそれはお互いをよく知らないから起こるのであってトラブルを解決していくうちにもっと相手のことが知れていったのでそういった意味ではある程度のトラブルは必要であったのかもしれないと今は思う。

言葉の壁、文化の壁を破壊するにあたって私はたくさんの涙を流しそれ以上に笑顔で笑って楽しんだ。家族をはじめとするいろんな人に支えられて安心で安全な毎日を大切な人たちと過ごすことができた。英語力はもちろんのこと、この留学で私は強い忍耐力、何にでも挑戦する心、誰とでも気さくに話せるコミュニケーション能力も手に入れた。このような素晴らしい機会を私にくれ、支え、応援してくれたすべての人に、これ以上ないくらいたくさんのありがとう！を伝えたい。そしてこの１年で得たことをしっかりと離さず身に着けて、私は将来の夢に向けて日々自分のペースで着実に前に進んでいきたい。